

「8K だから見えてくる ルーブル美術館」 ～空間を超えた映像アート体験～

為ヶ谷秀一



写真 8K 映像上映会場



写真 ICC 内 8K 上映会場



写真 イベントのパンフレット

はじめに

NHK は、放送と共に 8K 高精細映像による文化財や芸術文化のアーカイブ、そして鑑賞・展示等にも積極的に取り組んでいる。

東京・新宿にある NTT インターコミュニケーションセンター (ICC) において、2023 年 2 月 14 日～26 日に、「8K だから見えてくる ルーブル美術館」の 8K 映像コンテンツによる、“空間を超えた映像アート体験”を実証するイベントを開催していた。

8K 映像上映会場

会場に設けられたディスプレイは、横 7.2m、縦 4.05m (325 インチサイズ) の LED モニターである。プロジェクターによる上映では、会場を暗くする必要はあるが、LED モニターによるダイレクトビューなので、会場は少し照明を落とした環境に設定されてはいたが、明るい会場でも鑑賞することが出来る程の輝度であった。

上映された映像は、NHK がこれまでに 8K で撮影してきたルーブル美術館の彫刻や絵画の内、5 つの作品の映像が、約 20 分のコンテンツにまとめられている。

上映作品は、「ミロのヴィーナス」「サモトラケのニケ」「モナ・リザ」「ナポレオン 1 世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠」「宰相ロランの聖母」の 5 作品である。

上映された映像は、ルーブル美術館の館

内を、自らが鑑賞しながら歩いている雰囲気を感じる様に撮影されており、音は音楽のみであった。作品に関する音声ガイドは、Wi-Fi に接続されたスマートフォンで聞くことが出来る。自然光を取り入れた彫刻作品の会場では、天井から入る日の光も、広いダイナミックレンジの映像により、より心地良い彫像の姿を鑑賞できる映像となっていた。

それぞれ実際の作品の実物大の大きさを提示する映像と共に、作品の詳細部分にも視線が向けられて、“8K 映像だから見えてくる”の特徴を活かし、8K 高精細映像の解像度を活かした作品の一部を拡大した映像と組み合わせ、鑑賞者に今まで見たことのない新しい発見をもたらすように構成された上映コンテンツとなっていた。

作品によっては、表示されているディスプレイ画面に近づいて見ることが出来、鑑賞者はディスプレイ画面に近寄り、より作品を詳細に見ることが出来た。正に 8K の高精細映像による鑑賞法は、“今まで見えなかったものが見えてくる”新しい美術鑑賞法と言える。このイベントでは、中高生向けのワークショップも開催されており、8K 高精細映像が文化のアーカイブとして未来の市民に継承されて行く事が期待される。

大きな作品を実物大の映像で鑑賞

325 インチの 8K ディスプレイは、「ナポレオン 1 世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠」の絵画 (実物のサイズ：横 9m、縦 6m) を、ほぼ実物大の高精細映像で鑑賞でき、ルーブル美術館の実際の絵画の前に立って鑑賞している臨場感を感じさせる。8K モニターの LED パネルを構成する LED の間隔 (ピッチ) が、既に 1mm より狭くなってきており、輝度や色彩の表示能力も向上して来ている。

NHK と NTT インターコミュニケーションセンター (ICC) は、昨年 8 月にも「ゲルニカが来た! 大迫力の 8K 映像空間」のイベントを開催しており、その時には、パブロ・ピカソ最大の作品「ゲルニカ」(実物の大きさ 横約 7.8m、縦約 3.5m) を、実物大の 8K 高精細映像で上映公開した。

これから

8K 高精細映像システムは、放送のために開発されているテクノロジーを進化させて、文化財の保存や医療分野など、放送以外でも広くそのテクノロジーの活用領域を広げている。広がった新しい領域でのニーズやリクワイアメントを受けて、8K 高精細映像システムが更に進化を続けて行く事で、放送メディアにおけるコンテンツのクオリティ向上にフィードバックされるものと期待される。

課題は、持続可能なシステムとして構築することを目指し、省電力化やコストの低減化の実現であろう。

Hideichi Tamegaya